

地球の広報旅人・エッセイスト

# たかのてるこ

# 生きとし生けるもの、 すべての幸せを 祈る人たち



たかのてるこ  
世界65か国を駆ける旅人。神秘的なチベット体験を綴った『ダライ・ラマに恋して』、『ガンジス河でバタフライ』、『純情ヨーロッパ』など、著書多数。全国での講演、メディア出演、大学講師など、幅広く活動中。  
www.takanoteruko.com



『生きるって、なに?』  
たかのてるこ著  
540円(税込)  
ジュンク堂&丸善書店、  
送料無料でネット書店  
[honto]で発売中



上から:仏教グッズ、「マニ車」を回して祈るおっちゃん。/現地でなかよくなり、家に泊めてもらったなかよし家族。/「五体投地」という礼法で、生きとし生けるもの、すべての幸せを祈る人たち。/ダライ・ラマの法話を聞きに来たチベットのお坊さん。みんないい笑顔!



仲良くなったチヨズン&息子さん。  
家におじゃますると、暖炉に薪をくべて、家族みんなで団欒。時間がゆるやかに流れるラダック

どうってことないわよ」とチヨズンはにっこり。家族を何よりも大事にしているラダックの人たちと過ごしていると、日本では失われつつある大家族のすばらしさを感じずにはいられなかった。

ラダックには本当にモノがなく、肉も魚も野菜の種類も少なく、高地なので空気も薄く酸素も足りないのだが、人と人のつながりだけはめちゃめちゃ濃い。そして、すべてがナイナイづくしでも、自分たちの口に入れる物は、食べ物も薬もすべて手作り。そんな彼らの暮らしに寄り添っていると、心の底から安らいでいる自分がいた。

が少なければ、あるものを大事にして、家族や友だちと過ごす時間がはるかに人間らしく生きているように思えてならなかった。

あるとき、お寺巡り中に出会った現地の人たちに「何を祈ったの?」と聞くと、みな口をそろえて「もちろん、生きとし生けるもの、すべての幸せだよ」と言うので衝撃を受けてしまった。仏教のベースである輪廻転生を信じる彼らは、「人」限定で幸せを祈ることがなく、自分自身のお願ひごともしないというのだ。現地で意気投合した学校の先生、カルマに、「私も、『大好きなダライ・

ふだんの私は、自分で畑を耕さなくても、料理を作らなくても、スーパーとコンビニさえあれば生きていける。でも、もしかしたら私の生きている世界は、自分たちで欲望を懸命に作り出して、それに懸命に 대응しよう頑張っているだけなのかもしれないなあと思えてくる。何もかも

ラマに会えますように♡』とお祈りした後、世界の平和も祈ってるんだけどね」と言うと、カルマが言う。「自分の願ひごとをする必要はないよ。世界の平和には、君のことも含まれてるんだ。世界が平和になれば、君も自動的に幸せになるのに、どうして自分ひとりだけ幸せになろうとするんだい? 君の幸せと世界中の人の幸せはつながっているんだよ」と言われ、目からウロコがぼたぼた落ちる。

私がひとりでは幸せを感じる事ができないように、他の人だって自分ひとりでは幸せを感じることはできない。私の幸せは、他の人の幸せとも密接につながってる! と腹の底から思ったのだ。



旅の最後、面会できた憧れのダライ・ラマと。その物腰の柔らかさ、純真なほほえみ。お話をお聞きすると、自分の小ささが恥ずかしくなくなるほど!

世界をひとり旅することは、私にとって、そのときどきの夢を叶えてくれる「魔法のランプ」のような存在だと思ってしまう。

この世で一番おっかない国だと思っていたインドを旅して、ガンジス河でバタフライするというアホな夢を叶えたり、ラテンな生き方にあやかりたいと旅したキューバでは、最高に愉快なアミーゴ(友だち)もできた。

日常という長期スパンではむずかしくとも、短期決戦の旅先では目的に対して気持ちがまっしぐらだから、そのとき「自分が欲しているもの」が手に入る。スケジュールが決まっている大人数のツアーでは現地での出会いが限られてしまうものの、無限大に自由なひとり旅では、自分の求めることが現実になるのだ。

\* \* \*

ダライ・ラマに憧れて、リトル・チベットと称される北インドのチベット文化圏「ラダック」を旅したときのこと。

空港で働いていたおねえちゃん、チヨズンとなかよくなり、彼女の親戚が経営する民宿に泊まったのが縁で、家にお呼ばれして夕食をいただくこともしばしば。「急に夕食をこちそうになってもいいの!?!」大家族だから、ひとりふたり増えても、

その後、私は自分の願ひごとをするのをやめ、生きとし生けるもの、幸せを祈るようになった。すると、現地で、前世を覚えている少女と巡り会い、その少女の前世の家族(?! )にも会えて、旅の最後には北インドのダラムサラで、ダライ・ラマと面会できるという奇跡まで起きたのだ。

チベット文化圏を旅して以来、彼らのいてない暮らしに影響され、食事はなるべく手作りするようにになり、友だちや家族と過ごす時間を大事にするようになった。

会社を辞めて独立した後、大学で教えるようになり、奨学金の返済に苦しむ教員から「生きる意味が分からない」と打ち明けられ、彼の心に前向きな気持ちが湧いてくるような文章が書きたいと思った私は、「生きるって、なに?」という本を自費出版することにした。大ヒットしたら、返済不要の奨学金を作り、教育にお金のかからない世界を作りたいたいという大きな夢に向かって。毎年、正月になると、大勢の人が初詣に行くけれど、だれもが自分の願ひごとではなく、生きとし生けるもののために祈れるようになればいいなあと思う。世界中の人がそう祈ることができるとき、世界に平和が訪れると思うからだ。